

鳥居清経画の草双紙(四)

—『神明生姜市最初』『新奥州古戦物語』—
神明生姜市最初
遷宮

有働裕

(三) 解説 (『神明生姜市最初』)

本書は、後三年の役の合戦譚と芝神明宮の生姜市の由来譚とを組み合わせて作られたものである。

草双紙の作者が後三年の役を題材とする場合、どのようなものを参考にしたであろうか。黒本・青本の典拠についてのこれまでの研究成果をふまえて考えるならば、通俗的史書の『前太平記』、浄瑠璃の『後三年奥州軍記』(並木宗輔・安田蛙文、享保一四年)、または、『後三年奥州軍記』を利用した浮世草子『奥州軍記』(自笑・其磧、享保一六年)といったものか、思い浮かぶ。しかしながら、本書の場合はいささか内容が簡略に過ぎ、また独自の展開と思われる部分も多いため、直接の影響関係を明らかにすることができない。

もちろん部分的には、四丁表五丁裏に描かれた源氏の女房達が島台を持って集まる場面のよう、に、『後三年奥州軍記』の三

段目に描かれた、壺井の御館での剛と臆との座を争う花の会を模したもののように思われるものもある。しかし、影響関係を認めるにしてもそれほど強固なものは見出せない。例えば、主要登場人物についてみても、次の対照表に示したように一致しないものが少なからずある。上段が『後三年奥州軍記』下段が本書である。(○は上段と同名、×はそれに対応する登場人物がないことを示す。)

八幡太郎義家	○
大江維時	○
義家御台	○
加茂二郎義綱	○
大宅太夫光任	○
光任妻	いざなみ
大宅四郎惟弘	○
(光任娘) 藤枝	×

清原武衡	○
(武衡娘) 操	×
清原家衡	○
安倍仲成	×
黒川伴内	×
平太夫国妙	×
(国妙娘) 曙	○
鎌倉権五郎景政	○
×	かまくらの権六かげつら
(景政妻) 東屋	はぎのと
和田為宗	○
(為宗妻) 宮城野	おぎのと
鳥海弥三郎	○
(弥三郎娘) 信夫	小いと
×	(小いと腰元) 若な

また、両作品に共通する登場人物についても、その描き方にはかなりの開きがある。例えば、『後三年奥州軍記』においては、大宅太夫光任の一子四郎惟弘は臆病な性格に設定されており、そのことが二段目から三段目にかけての展開に大きくかわっているが、本書においては、五丁表に、

あ、それについても、せがれこれひろめ、たけひら・いへひらきやうたいのくびてもひつこぬけばよいが。

と、父光任の言葉の中にその名が出て来るに過ぎない。鳥海弥三郎の娘についても同様のことが言える。『後三年奥州軍記』の四段目では、鳥海の捕虜となった加茂次郎を信夫が恋慕し、同じく次郎を慕う武衡の娘操と争い、そして誤って父弥三郎に殺されてしまう。それに対して本書では弥三郎の娘は小いとの名で十丁裏に登場するが、

鳥の海のむすめ小いととは、かもの次郎かことちらとみそめ、こひしたひけれども、てきとてきとのことなれば、ちかよることもならず。こがれ／＼てついにむなしくなるぞ、ふびんなる。

と記されるにとどまり、加茂次郎が捕虜となったことなどは一切記されていない。

従って本書は、特定の典拠を有する作品というよりも、所謂後三年の役の合戦譚の世界の大枠を踏まえつつ、芝神明宮の由来に結び付くよう作者が自由に創作したものと見えよう。

芝神明宮は正式には飯倉神明宮と称する。以前は増上寺境内飯倉天神の社地にあったという説もある。『江戸名所記』（寛文一六年）の「日比谷神明」^{〔註〕}の項には次のような縁起が記されている。

武州豊島郡飯倉日比谷邑の神明は、本朝の宗廟天照太神の宮所なり、人王六十六代一條院の御宇、寛弘二年きのとの

巳九月十六日にあたりて、御神幣並に大牙一枚この地に降くだり給ふ。邑中の老少男女あつまりて、これいかさまにも神明のあまたくだり給ふべきしるし成べしと、あやしみてまつる處に、いづくともしらず、年七さいばかりの女子その所にあゆみきたれり、たちまちにまなこの色かはりおどりくるひけるが、くちばしりていはく、我はこれ神風や伊勢の内外両宮の神なり、これより東国にあたりて、軍の事ある故に、常陸の国鹿島の地に降臨し、その軍兵を退治しほどなく、帰座の道に及ぶ、われこの所に跡をとどめんとおぼしめす也、この故に二種のしるしをあらはして、まづ汝等を示す、はやく宮所をはじめておさめまつるべし、いかにもたうとみうやまは、末の世までもこのところさかへにぎわひてめでたかるべし、われまたまもりの神となりて、夜のおどろき晝のさはぎ、悪事災難をば他方にはらひ、あめがしたおさまり五こくゆたかならん、相模の国のうちに、藤原氏のもの、斎藤氏のものあらん、これをまねきて神職の長となして、宮つかへさせよとて、神明あからせ賜へば、少女も跡かたなくうせにけり、村中このきどくによりてうちをきがたく、まづ小宮をつくりて、御神幣と大牙を宮におさめ奉り、斎藤氏の人を尋ねしかば、相州足柄の内に、斎藤氏の人ありけるを、神明の御たく宣にまかせてまねきよせ、家をつくりて神職をつかさどらしめたり、靈験まことにあらたにして、いのりたてまつる事、こ

ろにかなはずといふことなし

御神幣が天から降つて来るところや源氏の東国での合戦とかかわりなど、本書の内容との共通点が見出される。直接『江戸名所記』によつたかは断定できないが、本書はこういった伝承を源義家や和田為宗らと附会して作られたものであろう。

本書の一四丁裏一五丁表に描かれている神明祭りは、約十一日間に及ぶ「だらだら祭」として、また、目を病んだ人が多く参詣する「めくされ祭」として知られ、生姜と千木箱（藤の花を描いた小判形の曲物）の市で賑わう。その由来については、『喜遊笑覧』『近世奇跡考』等の随筆に諸説が記されているが、本書の記述と似通つたものは見いだせなかった。

（注）『江戸文学俗信辞典』（石川一郎・東京堂・平成元年）によれば、飯倉神明宮と記されるのは享保の『江戸砂子』以降のこと。

五 『新奥州古戦物語』

（1）書誌

本書は『補訂版国書総目録』に

奥州古戦物語 二卷一冊 角新撰 頼黄表紙 著 米山鼎我
作、鳥居清経画 咸安永五刊 版国会・岩瀬
と記されているもので、『改訂日本小説書目年表』には記載がない。

本稿では、岩瀬文庫本を定本としたが、同板本である国会図書館本も適宜参照した。以下、両書の体裁を示す。

《岩瀬文庫本（請求番号 一〇二一六二）》

①表紙 原のもの。黄色。無地。一七・九センチ×一二・八センチ。

②題簽・外題 上・中・下巻とも原題簽。上巻のものは一三・一センチ×八・六センチで、外題は「新撰奥州古戦物語（上）」。

③本文匡郭 一六・一センチ×一一・四センチ。

④柱刻 上巻は、

こせん物がたり上

の体裁で一五、中巻は、

こせん物がたり中

の体裁で六、下巻は、

こせん物がたり下

の体裁で十一、十五了。

⑤紙数 十五丁。（三卷合一冊）

⑥画作者 十五丁裏に「戯作 米山鼎峨述 鳥居清経画」とある。

⑦板元 一丁表・六丁表・十二丁表上部の屋標より鱗形屋。

⑧刊年 記載なし。題簽の意匠から安永五年と推定できる。

⑨広告 なし。

《国会図書館本（請求番号 二〇八一二九一）》

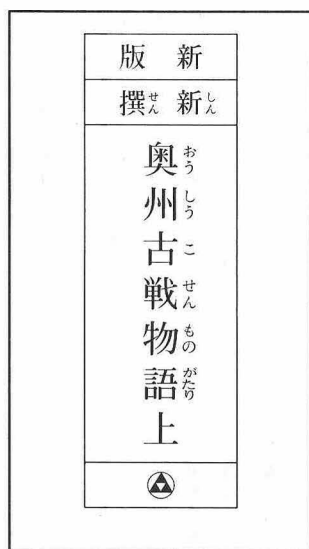
①表紙 後のもの。茶色。

②題簽・外題 後のもの。「新撰奥州古戦物語 全」と墨書。以下、岩瀬文庫本と同様。

（2）写真版及び翻刻

翻字不能の箇所は で示し、翻字が不確かであったり判読不能であるが前後関係から推定した箇所は「」で示した。

(表紙)



(上巻表紙)

ころはかう平十五年、ごしゆじやく
のゐんのぎやう、とういさたとう
むねとうぎやくゐをふるひ、
くわんふたいぢなし給ひしかども

さだ

とうが

ちやくしたけ

ひら・いへ

ひら

ていとをうかゞひければ、

ぶしやうちんじゆふのせう

ぐん八まん太郎源のよし

いへ公うけたまわつてぎやくとを
ほろぼし、たいちのせんぢをかう
むり給ふ。されどもとつかの

ぎよけんふんしつのう
へに、何もの共しらず、
たまきのみやを
うばひ奉れば

いくさたち

がたく

いろく

けいりやくを

めくらし給ふ。

(一丁表)

八まん太郎よいへの

(二丁裏)

みだい、しきたへ御せん

は、けんじやうぜんじ

なをかたの

そく女にておわせしが、

なをかたはたまきのみやのかしづき

にてなんぎし給ひければ、

内々にてはみまひのつかい

くしのはをひくがごとく、しつけんわだ左衛門のしや

うためむね・いこまの介御ぜんへあいつめ、ため宗

申けるは、とのはぎよけんとみやの御せんき

御いのりのためとして、つるがおか八まん宮へ

御さんけい、いまだ御きくわんなきところへ

みやよりちよくしとして大江のまさとら

まいるよし、いではからい申べし。さればいの、

そなたよきにはからい、御きくわんまで

御ちそう申しやいの。さてまた御そば

つとめのうりわり四郎、あくぎやくしたいにあいてうじ

候が、とのは御そんじなきことは候まじ。

いや／＼今あらだて、は、かえつて御せんぎのじやま。あくぎ

やくのともがらと一みこそさいわい、よきせんぎのてがらと、

とのもあふせられしぞや。(二丁表)

ぜんをのむものはおのれにしようひとをし[□]あた[□]

(二丁表)

好善者^已直人能^不能[□]

あくをのむものはれおもふにてわみをうしなふ

好悪者我似思我身失、といへり。ちよくし大江のまさとら

は、さきだつてみつるぎふんじつ、その上たまきの宮ゆくへしれず。

そのせんぎ、くさをわつてすべきところ、いつまでべらりくくとせんぎのさたもなくうちすておかる、や。ぶせうのしんていいおかし。その

へんとうう給はらんとのべける。なるほど御ふしん御もつとも、此二品せんきうちすておくは、すなはちくさをわつてのせんぎなり。とをからずして

せんぎしだし、おめにかけん。此二品いでさせ給はぬうちは、ねいじんばらもゑいくわをすべし。いてさせ給へば、ねい人のじやくめついらくとおぼしめせ、とまさとらをしりめにかけてのたまへば、まさとらもそこきみわるく、いちゑんそんなことはぐめんにおちぬ事でござる。いや、きんていのうちぎやくとのみかたのともがらなくては、

此二しなゆきがたなくならせ給ふはずはなし。たとへいづかたへわたらせ給ふとも、よしいへまなこのくろきうちはとをからずせんぎしだし申さん、とのたまへは、いんよしいへどの御ちそう、さてくいかい御ぞうさでござつた。おこ、ろづかいせんばんく。

さて四方のたきすいと申をはじめてたべ、

ことのほかたべよひました。いやはや何と申たか。

たわいくおいとま申ませう。

(三丁表)

おのれがやを^しをつ、まんとほつと^きき
已邪智欲包則

つみなきものを^しなて、そのた^しまを^しふ
無罪者罪而覆其邪

(三丁裏)

下しんうりはり四郎、

いこまの介になわをかけ、

けいせいこひぎぬ

引たて御せんにいで、

このいこまの介ぎ

けいせいめにくさりつき

みたちへ引こみ候ふぎ

ものゆへ、りやう人共にな

うつて候と、てがらじまんに
あいのぶる。よいいへきこし
めし、しおきあがむねにあり。
いこまの介より大それたふぎ
ものがほかに一人ある。これ
をまづさきへしまはねはなら
ぬ。けいせいぐるひはふぎで
はない。しゆじんの女ほうに
心をはけるやつこそふぎ。

あ、それはきつい。大のきまり大あたりで
ござりますと、わがみのうへと

このたび、きん

さ、れてこそくく。

ていにて大しやおこなわれ

給ふにつき、八まん太郎ちよくを

かうむり、おうしう一こくのる人御めん。これある文は、

せん年ちよつかんをかうむるかつら中納言のりくに

御めんくわはのところに、のりくにびやうししければ、

一子のりうちをぞめしかへし給ふ。これまでこそしまもりなれ、
さすがのりくにの御子そく。さあくせうぞくあらためられ、
これよりかつら中納言のりうどとなのられよと、しやうぞく
あらため、大たちさしてかへらるゝ。

(四丁表)

うりわり四郎、かねてけいせい（四丁裏）

恋ぎぬにこゝろをかけしところ

に、いこまの介とふかくなじみ、くるわ

をおちていこまの介をたづね

きたりければ、うりわり大きに

いかりて二人をふぎものといひ

たてけれども、大せう、

けいせいいくるひはふぎにあらず、

されどもゆふ女をやしきへ

引こみ、さほうをやぶりし

ものなれば、かんどし給ひてめふせける

は、これよりおうしうへ下り、かの

せんぎの事でがらもできしなば、これを

かうにかんどうゆるすべし。そのけい

せいとふうふになつてともにせんきし出す

へし。はやく／＼あふせをちかふべき。

いでゆくむかふへ四郎がおと、うりわり

ぐん次下のもの引ぐし、さあそのこひきぬ

をこつちへわたせとうけくれは、

さしぞへわたし、ふうふ

にてきりまくれば、みなちり／＼に

にげゆきける。いこまの介は

いつくまでもとおちてゆく。

（五丁表）

このすべたやろう。
のらかぶんとして、
此いこまにてむかい

すいさん也。

うぬらが
はたらい
てもなん
ともおもや
せねど、
まづにげ
ませう。

恋ぎぬは、おつとのあと

(五丁裏)

をしたひ、へいを

こしておいつかんとすれども

あしが、りなければ、わきざしを

あいた

へいにつきたて、

くく。

つかをあししろ

こひきぬは

なむさん

にせんとへい

わきざし

して

のきわにたち

ぐすと

やられた。

よりける

へいへ

あゝ、

おりふし、

つきこめ

しんだ

軍次はやうす

ば、ぐん次

く。

をうかゞ

がどうばら

はんとへい

つきぬかれ、のた

のそとにより

うちまわりて

かゝりいる共

し、てげり。生駒の介は

しらず、

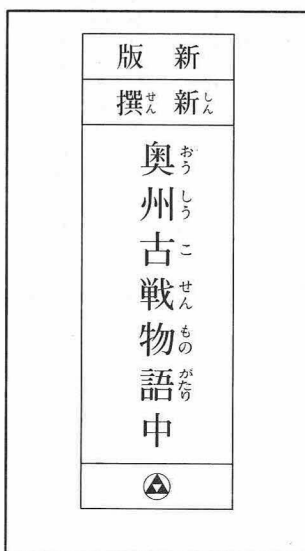
立かへり、やあこひぎぬか

てがらく、御二しなのせんぎの

かどいでよしと

ふうふもろとも

おうしうさしてぞ下りける。



なみうちきわにより

あつまるかづきのあまが

ひるやすみ。これ、きかしやつ

たか。けふおだいくわんさまから

おふれのあつたはこのうら

きんじよに八まん太郎さま

おはなしなされた、あしに

きんのふだのついたつるが

あるによつて、かりうど

にてもなにニても

これをとつたものは

さかさばつつけとの

こと、おそろしい

ことじや

ないかいの。さればい

な

それはかり

うどのこと、

こちらが身の

うへには

かまひ

のない

事さ。

(六丁表)

うとう文治は、一子清どうしとて、る人（六丁表）
たけひらの一子をあづかりおきけるに、

きさらぎのまへつころよりやまひに

おかされ、りやつじはいろ／＼てを

つくすといへとも、文治ひんきうゆへこゝろに

まかせず、いろ／＼とせしかどもせんかたなく、

日なしかしのなん兵衛がかたよりぎん六十近かりけるに、

はや日ぎりもきれたりととちうにてさいそくになんぎして

いるところへ、女はうおたにくすりとりにゆきもどりがけ、

まあ／＼おまちなされて下さりませ。此ほうにじよさいはなけ

れども、きようがわづらふゆへ。やあかましい、

いつでも／＼おなじいひわけ。そのかねのかはり

にわれをつれてゆくとむりに引立ゆく。やう／＼おたにはふり

きりうちへにげかへりける。なん兵衛はあとをししたふて

おふてゆく。おりふし、金のふだのつきたるつとび

きたりければ、文治きつとみてやがてゆみとや

とつてひやうどいる。あやまたずいておとす。

金の札ひつちぎり、いつさんにこそかへりける。

まづこれをしめれば、わうごん十両はこつち

のものだ。あめの

もちにさとふつけて

くふやうなしうちじや。

うまい／＼。

（七十表）

なん兵衛は文治がかたへきたりければ、（七丁裏）

こいつさきほどのかねさいそくにうせ

たりと、ふうふいかゞせんと

あんじけるときに、いかに文治そのほうは

しるまじ、われこそはおうしうのじう人

あべのそんきよわらのいへひら也。何とぞして

八まん太郎を一たちうちみんと心をくだく

所、せんこくなんぢつるをころせしこそよき

てがら、われをそ人して南兵衛こそつるころしとて

引つれば、八まん太郎のまへにいてなわ引ちぎつて、

ねんらいのこつぶんをさんぜん。なんじはほうびの

金にてきよとつじがにんじんもかふてのますべし。

文治がそ人にて文治がいへをおつ

とりまき、つるころしのなん兵衛

このやにかくれいるよし、そ人あつ

てたしかにきく、めしとりにむかふたり、

とこうじやうによばわれば、

南兵衛

とんでいで、とりでを

一三人とつてなげ、どつかと

ざし、さあぜひにおよばぬ、

そ人あつてからめとらるゝ、

これまでのうんあい、さあ

よつてなわかけられよ、

となわか、りひかれゆく。

とつた／＼、しめたぞ／＼、

つるをころした

かはりに、つるりと

しばつてのけた。（八丁表）

かくて

けんじやう

なをかた、

たまきのみやの

御ゆくへしらぬ

つくしの

ほと、ぎす、

なつさりふゆの

かれはつる

にはのこぼく

もしろたへの、

ゆきふみわけ

てよいいへ公、

みまいのため

入きたり給ひ、

なをかた公にはさぞ

御くろうしれさせ給はねば、

しうととてやうしやはならぬ、

このこと申さんため、よいいへ

参りたり。これはむこどのの

あふせ御もつものこと、

なるほどせつちつかまつる。

かゝる所へかつら中納言のりうぢ（八丁裏）

御入とあないにしたがい、のりうぢ公、はく

ばい一糸だてにもちて、この一おりまだふゆ

ごもりながらしん上申。いかにもこのしらむ

めを御ぢさんのやう、せうちつかまつる。し

ろきは源じわれは平け、此しらむめをもつて

はらされとのことならん、とはだおしくつろ

げ、みやのかづきにてみやをばいとられし申

わけ、ただ今けんじやうなをかたせつふくつ

かまつる、よろしくそうもんいたされよ、

と九寸五分をはらにつきたて、ひきまはす。

はまゆふ、わつとはかりにふししづむ。しき

たへかことおたのみ申、よいいへどの、みや

のせんきよきにはからいくれられよ、ぶしや

うのやくといひながら、おたのみ申とばかり

にて、あさひにあへるしらゆき

とき、てはかなくなり給ふ。

エ、くちおしや、

みやのゆくゑもゑ

ぜんきもとげず、

ひとへによしいへどの、

おなさけたのみます。

（九丁表）

よしいへ公は、つるころし南兵衛こそ

(九丁裏)

いへひらなりとみあらわし給ひ、

なわをといて、たがいのうんはせんじやうにて

けつすべし、とてゆるし給ふ。

むすめおきみは、は、の

けんしやうなをかたのむすめおそ

じがいをかなしみなげき

では、たけひらといひかはし、い

けるを、よしいへみ給ひ、

へでしていまはふうふのゑんもき

ち、たけひらとゑんき

れ、一人むすめおきみとともにひ

たれば、おきみはわが

にんとなつてさまよひけれども、

やしないそだつべし、

ち、なをかたになんぎのことある

こ、ろやすかれおそで、

よしき、および、心もとなくきた

とてつれてきくわん

りてやうすをきかんとせしに、

なし給ふ。

かんとおのむすめことにかきたけひ

らが女ぼうなれば、たいめんかなわぬ、

とておい出しければ、せんかたなくわが

みをくひてくわいけんのどにつきたて、

むなしくなる。ありがたふぞんじます。

あつはれ

このうへもなき御かうおん

ぶゆふの

おたのみ申ます。われもかやうの

めいくんかな。

身にならずは、いもとにもあい、

おそろしい

めいよおばよといわれんもの、は、は

かな。なさ

これまで、さらばやく、とそのま、

けある大

しやうじやなあ。

(十丁表)

かつら中納言のりうちとなりしまよりきたり給ふと、(十丁裏)

これこそたけひらとにらんでおい

たり。よくもみとがめ給ふものかな。あつはれ

めいしやう、たがいのうんはせんじやうく。てうてき

たけひら・いへひらいけどつてめんはく

させんといふ

は

おもて

むき、

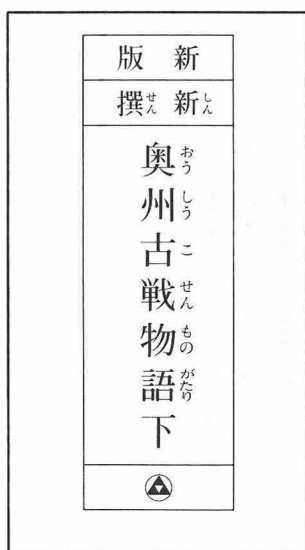
そのせうぞくを

そのまゝに、かつら中納言

のりうち公御くろう

にそんする。

(下巻表紙)



いこまの介・こひぎぬは、きみの
なさけかんどううけ、ぎよけんとみや
のおゆくゑをせんぎしいだし、

御かんき御めんを

かう

むら

んと

おうしう

さしていそぎゆく。はやひもにし山におも
むきてゆくさきとをきたびつかれ、はるかに
みやる一つやにたどりついて一ちやを

あかさんと、

ふう

ふ

もろ

ともいそぎゆく。

(十一丁表)

りんかもなき一ツや

のつたはさかだちうろこの

ごとくのあばらやに、なれ

たるらうちよありける。おりふし

たそがれに、たび人一人ちとたばこの火と入きたる。こちへは
いつてやすましや、といへば、たび人、いやこのみちはことの
ほかぶつそう、一やをあかさせたまわれ。かしやすき事、とま
りたまえ。このあばらや、もしどろぼうでもこまいものでもな
い、そのくびにかけてあるろぎんこつちへあつておき給へ。
いやこれはといふまもなくひとつとらへてくわいけんぬき、かた
さきへぐすとさす。あつといふまにうできりおとし、さいふと
れどもはなさねば、うでともにおごけへ入、しがいを糸んの下
へおしこみ、さあらぬていにてかみさしのをく□みてこそゐた
りける。

こいつふといとろぼうめだ。はやく

くたばれく。

エ、くち
おしい

人ころし

く。

おりふしたそがれすぐる

ころ、いこまの介・こひ

きぬ、はやうく一ツやに

いひすてしこそいそくやう、こ
ひきぬはきみわるく、このあば
らやにたゞひとり、ことに一ま

寒林かんりん 骨打ほねうつ 霊鬼れいき (十一丁裏)
深野花供しんやたくわくす 天人てんにん 風漂かぜひょうなう 危あやうたる

あだちがらは。

たどりつき、おやどの

御むしんといひければ、

あゝこちへはいらしやれ、

と、さやうならはと

うちに

入。おりわるくこひ

ぎぬはつかへさして

みなやむにぞ、らう

ぢよはこのさきのしゆく

によきくすりあれば、

かうてきてしんせさしやい。

わしがみちを

あんないしてしんぜうと。いこま

はさやうならばとてらうぢよもるともくすりをかい

にいそぎゆく。らうぢよはたちかへり、

これくぢよちう、あのせうしのうちをかならずみ

まいぞ、かまへてあけて下さるな、

をみるなといふたもこゝろへず、
とそつとのぞけは、

しやりこへのあるに

びつくりたちのくひやうし二

おごけをふみかへしければ、

うでとともにかねざい

ふ、いるにもいれぬ

おりからに、あるじの

ば、はたちかへり。

(十二丁表)

これぢよう、みれば
なにやらうろく、

むないたへつ、こ(十二丁裏)

なにやるぞ。これぢよう、

む九寸五分、あつと一こへさけ
ぶうち、むないたわつててを

そなたにむしんがある。

さしいれて、きもをひきいだ

なんでござります。そなたの

じつほに入、まもりぶくろを

みについたものがほしい、もら

ひつさらへ、おくのま

わふわへ。あ、いやかねはぬしが

さして入にける。

もつていかれたればこ、にはいないと

ア、くるしいく、

いふことか。いやかねはいらぬ、はたち

ぬしのかほが

より三十までのあいだの女、このいき

一トめみてしにたい、

ゝもが入やうだ。そのいきゝもがほし

かたきをとつてく。

いはへ。ゑいそれは、それはとは

いはさぬと、とつておつふせむまのりにのつか、り、

ひとまへはいりまもりぶくろをひらき、かねでもあるやとさかしみればかきつけあり。ひらきみれば、これはいかに、おうしうのしうにんあべのさたとうかむすめあさきぬとあり、さてはわかむすめか、ふびんなさいこをとげさせしそ。げんざいわがむすめをてにかけてころすといふは、あまたの人をころせしむくひか。さるにてもかのおかたのおしをなをして、おうしうの天りをたて、八まん太郎をほろぼせん。

むすめがいききもも、ぐんちんのちまつりと、

いさみくへ入にける。(十三丁表)

いこまの介は立かへりみれは、女ぼうはあけにそみ、なむ三ぼうばゝめにたまされしがさんねんや、いでかたきとらんとて一まのせうじけやぶつてとびこむ。むかふはしゆぎよくをのべたる御でんある。みすまきあげて、おさなみやそはにらうちよにつきしたかい、いこまの介もす、みかねしばしためらいたりける。

ころしてみれば (十三丁裏) わがむすめ、きいておどろくいこまの介、くしけのないしかのいきゝもとつてたにそこへなげすて給へば、水まき上でとつかのぎよけんれいろうとあからせ給へば、いこまのすけ、さてこそく、この二しなさへいでさせ給へばわがきみへ申上んといさめば、

くしげのつほね、あれこそまことはよいへのおと、しんら三郎よしみつ也。このたまきのみやもいつわり也。われたけに□だむらゆへかほをもしらぬこそさいはいかくははからい申たり。この二しなをとり

系ては、あに、

ば、あめ、つまのかたきかくごしろ、とはつたとにらめば、らうちよはこへかけ、かたじけなくもとうぎんのお、とみや、たまきのみやのぎよくさまちかくひろう也。

かはりて

いこま

かかん

とうゆるす。

かくいふわれは、おう

しうのつかさあべの

太夫さだとうがつま

いわせなるが、なさけ

なくもわがおつと八まん

太郎にほろほされむ

ねんの月日をおくりし

うち、せいてうしたる

たけひら・いへひら

たまきのみやを

ばいとりしは、おうしうの

だいらとして八まん太郎

をほろほさんため。されども

みやおしにてわたらせ

給へば、廿より三十乞

のあいだの女のいき、も

をとり

めうやくにもちたてまつらんと、

(十四丁表)

かくて一せんにおよびければ、八まん太郎
よしいへ公、一せんのうち

(十四丁裏)

かち給ひ、たのみにおもふ

とりのうみ弥三郎もうちに、
うとう文治もうたれければ、

たけひらも

かまぐらの権五郎かけまさにうたれ
ける。いへひらはいこまの介にいけどられける。

たけひら

さいごに申せしは、かほどのめい

しやうといひ、ことになさけうけしたいせつなれば、
なにとぞおと、のいへひらを御けらいとも
なしくださらば、しやふくせ、の

御かうをんたのみたてまつる。よろしく
ごん上下されよ、かげまさどの。

けらいニしてくれろとは
これはきみの

わるい

はらだ。

なにとぞ御けらいに
なし下されかし。

どつこい

しめたぞ。

(十五丁表)

よしいへ公、一せんに

うちかち給ひて、

たけひらかくび

しつけんましぐ、

かのいひおき

たるおもむきを

権五郎かげまさ

申上げれば、いへ

ひらことは身ぢかくめし

つかいゑさせんとて、御きんじゆにぞ

なし給ふ。奥州ちんじゆふ

のしやうぐん源のよしいへとまつ

世に名高き名せうなり。

戯作

米山鼎我述

鳥居清経画

(裏表紙)

(3) 解説

本書は浄瑠璃『奥州安達原』（近松半二・北窓俊一・竹本三郎兵衛・竹田和泉、宝暦一二年）を草双紙化した作品である。細部には一致しない点も見られるが、『奥州安達原』全五段の内容をほぼ満遍なく各丁にちりばめたものとなっている。^(注1) 本書の依拠状況を『奥州安達原』の梗概を以て示せば以下のようになる。

《初段》八幡太郎義家は、鎌倉御所において、行方知れずとなった十握の宝剣の探索が進まぬことを、帝の勅使大江維時に責められる。加えて、帝の弟環の宮と匣の内侍が何者かに連れ去られる。宮のお守り役で義家の舅の廉仗直方は、その落度によって閉門となる。（↓一丁表、二丁裏・三丁表）

義家の家来志賀崎生駒之介は、愛人の傾城恋絹（安倍頼時の娘）との密会を瓜割四郎に見咎められ不義者と訴えられる。義家は生駒之介を勘当し、夫婦を奥州へ行かせて環の宮と十握の剣の行方を尋ねさせる。（↓三丁裏・四丁表）

《二段目》外が浜の海辺で、義家が金の札をつけて放した鶴の噂話を海女が昼休みにしている。（↓六丁表）

獵師善知鳥文治安方の女房で海女のお谷は、子供の清童の病気を治すために車銭の南兵衛から借金をしているため、南兵衛にからまれる。（↓六丁裏）

安方は実は安倍家の旧臣で、清童は主君貞任の子であった。

安方は薬代のために金札のついた鶴を射殺してそのことをお谷に訴えさせ、自分の命と引きかえに賞金を得させようとする。

（↓七丁裏）

しかし、清童は死んでしまう。南兵衛は自分が貞任の弟安倍宗任であることを文治に明かし、文治に代って鶴殺しの罪を負い、義家に近づいたためあえて役人に捕えられる。（七丁裏・八丁表）

《三段目》閉門中の廉仗の許に妹娘敷妙が義家の使いとして訪れてその失態を糺し、その後から義家が来て事件についての自らの推察を述べる。桂中納言教氏がそこに現れ、廉仗に切腹するように勧める。（↓八丁裏・九丁表）

廉仗の姉娘袖萩は十六の時にある浪人と駆け落ちし、今は盲目の袖乞いとなっていたが、父の難儀を聞き、娘お君とともに直方宅の庭先に立って不孝を詫げる。しかし、袖萩の夫が実は貞任であったとわかり、袖萩と廉仗とはともに自害する。

（↓九丁裏・十丁表）

義家は教氏を貞任、南兵衛を宗任と見抜くが、「環の宮と宝剣の所在、責むるとも白状せじ」と戦場での勝負を約して逃がす。（↓十丁裏）

《四段目》生駒之介と身重の妻恋絹は白河の関を越えて奥州に至る。（↓十一丁表）

安達原の一つ家では老女が旅人を泊めては殺害し、金品を盗んでいた。その一つ家に生駒之介と恋絹は迷い込む。（↓十一

丁裏・十二丁表)

老女は安倍頼時の妻岩手で、謀反の軍資金を集めるために旅人を殺していたが、環の宮の止声病を治す秘薬を得るために、娘としらず恋絹を殺し、胎児の血をとる。(↓十二丁裏・十三丁表)

環の宮を奪って止声病を治し奥州の帝と仰ぐ企てであったが、環の宮は実は義家の子八つ若、匣の内侍は義家の弟新羅三郎義光であった。すべては義家の計略で、宝剣は取り返され、岩手は自害する。(↓十三丁裏・十四丁表)

《五段目》安倍一族と源氏との戦いは源氏が勝利する。貞任は義家に宗任のことを頼んで自害し、宗任は義家の家来となる。(↓十四丁裏・十五丁表)

以上のように『奥州安達原』の草双紙化のみの趣向といつてもよい作品であるのだが、先にも述べたとおり、浄瑠璃正本の内容と細部まで完全に一致しているわけでもない。

作品形態の違いから言って、浄瑠璃に描かれた場面のいくつかが草双紙において省かれているのは当然のこととして、四丁裏から五丁表にかけての恋絹の活躍する場面が浄瑠璃にないのは気になるのである。また、浄瑠璃では安達原の岩手の求めているのが胎児の血であるのに対し、草双紙では「はたちより三十までのあいだの女のいきぐも」となっている。

これらは草双紙作者の創作・改編とも考えられるが、浄瑠璃

あるいは歌舞伎における一つの上演形態を写しているとも考えられよう。^(注2)

(注1) 梗概は日本名著全集のものによって作成した。

(注2) 本書の刊年に近いところでは、安永四年四月に中村座で『奥州安達原』の二、三段目が上演されている。中村助五郎十三回忌追善狂言で、仲蔵の義家、廣治の文治安方等の配役。『歌舞伎年表』による)

〔付記〕本稿を成すにあたり、資料の閲覧・翻刻・写真版掲載を御許可下さった西尾市立図書館岩瀬文庫の皆様へ深謝申し上げます。

また、本誌第五十集の『神明生姜市最初』の翻刻につきまして木村八重子先生より御丁寧な御批評を賜りましたこと、厚く御礼申し上げます。参考にさせていただき、以下の部分を訂正させて戴きます。

それらに↓それ／＼に (P 58 十一行目)

すちいたり↓まちいたり (P 61 六行目)

市川団之助↓市川門之助 (P 64 一行目)

そのま、ありやらば↓そのま、。ありやうは (P 64 二行目)
たけきくまをくたれ↓たけきくまを、たれ (P 66 九行目)

御帰〔洛〕↓御帰館 (P 69 二十行目)